日１６－８１

「後妻業の女」　****

２０１６（平成２８）年６月６日

鑑賞＜東宝試写室＞

監督：鶴橋康夫
原作：黒川博行『後妻業』（文藝春秋刊）
武内小夜子（後妻業のエース）／大竹しのぶ
柏木亨（結婚相談所所長）／豊川悦司
朋美（耕造の女、一級建築士）／尾野真千子
尚子（耕造の良女、専業主婦）／長谷川京子
ホステス／水川あさみ
博司（小夜子の放蕩息子）／風間俊介
後妻業の女／余貴美子
小夜子の６番目の夫、元酒虫製除業／六平直政
小夜子の７番目の夫、元不動産会社社長／森本レオ
小夜子の８番目の夫、元テレビ局役員／伊武雅刀
継跡／泉谷しげる
獣医／柄本明
舟山喜春（不動産王）／笑福亭鶴瓶
耕造（小夜子の９番目の夫、元女子短大教授）／津川雅彦
本多秀則（裏社会の探偵）／永瀬正敏
２０１６年・日本映画・１２８分
配給／東宝

＜後妻業とは？個々の相続争いと何が違うの？＞

「後妻業」とは聞き慣れない言葉で、原作者黒川博行氏の造語かもしれない。この言葉は中学受験や大学受験には無関係だが、今や資産家の老人たちで知らない男は誰一人としていない有名な言葉になった。「後妻業」とは一体何？それは、本作のチラシが現在の社会情勢をきっちりデータ分析したうえで、きっちり言い当てている。すなわち、

> 婚活大国ニッポン！結婚相談所、全国に約４０００社、利用者６０万人。長寿化、核家族化に伴う結婚観の変化、年金制度改革による、熟年離婚件数、急増。６５歳以上の一人暮らし、約６００万人。６５歳以上の男性５人に１人、女性２人に１人が独身。熟年婚活、倍増。そこに目を付けて、金持ち男の後妻入り財産を奪うのが、「後妻業の女」である。

１００年以上の歴史がある映画には、過去さまざまなヒロインが登場した。ヒロインには様い美女が多いが、それに限定されないから、悪女的な女もヒロインを多い。しかして、本作のヒロイン（？）武内小夜子（大竹しのぶ）はどんなタイプ？

現在の時代状況下で「後妻業」と題された黒川博行氏の原作が脚光を浴びたのは、そのテーマ性をそれまでもたびたび起き言ったが、後妻に入った女と子供たちの遺産相続争いという個々の事件ではなく、「後妻業」という「なりわい」の設定にしたのだ。弁護士は弁護士資格を持たなければ、不動産仲介業は宅地建物取引士の免許（いわゆる宅建免許）を持たなければ、「業として」できないものとされている。しかし、素人が単発的に弁護士や不動産仲介業者と同じ立場に仕事をしても、それで報酬をもらうから業として継続的にやらなければ必ずしも違法ではない。それと同じように単発的に、後妻が子供たちを差し置いて夫の遺産を一人占めする事件が起きても、それは「後妻業」ではない。しかし、本作のヒロイン小夜子のように、６番目の夫（六平直政）、７番目の夫（森本レオ）、８番目の夫（伊武雅刀）、９番目の夫・耕造（津川雅彦）と、次々に金持ち男の後妻に入り遺産の一人占めを続けていけば、それは立派な「後妻業」・・・？

＜遺言公正証書にも期待が！＞

後妻に入った女が夫の遺産を子供たちに相続させず、自分だけで一人占めするための合法的な手段が遺言公正証書。弁護士法３４条を越えた私はこの手の事件をたくさん経験しているし、あっと驚く顛末件もたくさんあった。秘密証書遺言は厳格な形式が必要だし、家庭裁判所による検認手続を経ないわけにはならないから、その効力をめぐって争われることが多い。しかし、その点は遺言公正証書ならＯＫ。

一般的にそう言われているが、疑心入れたばかりの妻に遺産を１００％相続させ、それまで仲良く暮らしていた子供たちには一切相続させないという遺言公正証書の内容は不自然。そう考えた場合、子供たちはその遺言内容は被相続人の生前のホントの意思に反していると主張して「遺言公正証書無効確認の訴え」を提起し、根本的なその内容を争うことができる。また、本件にも登場しているように、後妻以外の相続人には「遺留分」として法定相続分の２分の１に相当する権利が保証されているから、その権利を行使すれば法定相続分の２分の１はゴザキープできる。

しかして、耕造には長女・尚子（長谷川京子）と次女・朋美（尾野真千子）という２人の娘がいた。そして、小夜子を八ナから信用していない朋美には弁護士の同級生もいたから、小夜子から、夫が残した遺言公正証書にもどさいて「遺産を一人占めにする！」との宣言を聞けばすぐに弁護士に相談し、遺留分減殺請求と遺言無効確認の裁判を提起することができる。もしも、朋美から依頼を受けてその裁判をやれば両者ともに勝訴し、遺産は尚子と朋美の２人で２分の１ずつ分けるという結果を導くことが可能。自信を持ってそう言えるのだが・・・。

＜おおさかシネマフェスティバルの有力候補に？＞

去る２０１６年３月６日に「おおさかシネマフェスティバル２０１６」が開催された。そこでは、「関西で公開された作品を年間２００本以上鑑賞した関西在住の映画ファンとジャーナリスト」という資格をクリアした審査員が、ベストテン映画と作品賞、監督賞、主演男（女）優賞、助演男（女）優賞等の個人賞を選定することになっている。私もその一員だ。しかして、今回の主演男優賞は佐藤浩市、主演女優賞は樹木希林と、いずれも大阪色のない伊優が選ばれた。しかし、監督賞はコテコテの大阪色いっぱいだった『映画コンバース』（１５年）（『シネマルーム３５』未掲載）の大野弘監督が受賞した。ちなみに、大阪色いっぱいの映画は、武部好伸氏の『ぜんぶ大阪の映画やねん』（平凡社刊）にまとめられている。

しかして、本作の舞台はなぜ大阪に？それは『ローマの休日』（５３年）のヒロイン、オードリー・ヘプバーン扮するアン王女にはローマが、『面と声に吉りぬ』（３９年）のヒロイン、ヴィヴィアン・リー扮するスカーレット・オハラにはアメリカ南部のタラがよく似合うのと同じように、小夜子には大阪が似合うからだ。そのことは幸か不幸か、喜ぶべきか悲しむべきかは別として、来日の一致するところだろう。しかして、そのヒロインを演じる女優は誰がベスト？

板谷謙治監督の『団地』（１６年）が６月４日から公開され、そこでは１６年ぶりに藤山直美がヒロイン役（？）を演じている。その大阪色ユニークな藤山直美も、本作の有力なヒロイン候補の一人かもしれない。しかし、貞度家の男たちをその魅力でイチコロにするヒロインには、藤山直美よりやはりは大竹しのぶがピッタリ。その大阪弁もピッタリだ。浦山桐郎監督の『青春の門』（７５年）でデビューした時の大竹しのぶの純粋な魅力は強烈だったが、５８歳の今でもその魅力は「後妻業の女」にまさにピッタリ。他方、小夜子とコンビを組む結婚相談所所長の柏木亨には、誰が適役？それは、本作キャスティング通り豊川悦司に決まり！まさにこの物語、この設定では大竹しのぶと豊川悦司のコンビが最適、最強だ。すると、来年のおおさかシネマフェスティバルでは、本作が作品賞に、大竹しのぶと豊川悦司が主演女優賞と主演男優賞を受賞・・・？

＜ここまでやる？後妻業と殺人との線引きは？＞

私が本作を試写室で鑑賞した日の夜のテレビでは、外務要一東京都知事による政治資金の私的利用疑惑問題（「公私混同問題」）について記者会見の二ュース一色になっていた。彼が依頼した「第三者」の弁護士が下した結論は、「違法ではないが、一部不適切なものがある」ということ。それを受けて外務知事は「一定の金は返す」「別荘は売却する」と反省の弁（？）を述べつつ、「引き続き都知事の職務に邁進したい」と語っていた。ここでの最大のポイントは、政治資金規正法はあくまで「規正法」であって「規制法」ではない。支出の是非をめぐる規定はないため、知事が政治活動と言い張ればそれが通用し、違法性は問えないこと。外務知事はそんな法律の仕組み（抜け穴？）を最大限活用して、延命を図っているわけだ。

後妻業のターゲットに定められるのの第１条件は、金持ちであること。その男が病気持ちであればなおよし。相ちはそうした公然としていたが、それは不適切な発言であっても、決して違法性はない。また、後妻にすべての遺産を相続させるという遺言公正証書を残した末夫が死ですれば、それは夫の真意ではなかったということを子供たちが立証するのは難しいうえ、遺言公正証書は形式さえ整っていれば違法性は全くない。まず当然ながら、夫に早く死んでほしいと後妻が内心願うことにも何ら違法性はない。したがって、後妻になった個々のケースで、たまたま金持ちの夫が遺言公正証書を残した末単純に死んだ場合、後妻が遺産を一人占めするケースが発生しても、それは外務知事のケースと同じように不適切であっても違法性はないことが明らかだ。

しかし方一、後妻の小夜子が相ちと結託（共謀）して夫・耕造を殺したとなると、それは明らかな殺人罪。しかして、小夜子のように次から次に後妻に収まり、次から次に夫が死亡し、次から次に遺言公正証書によって遺産を一人占めしているとなると・・・。

＜元刑事の同伝所の男との攻防戦は？＞

弁護士が事件の調査のため興信所を使うことはよくあるし、その職員が元刑事ということも珍しくない。４月２５日に観た是枝裕和監督の『海よりもまだ深く』（１６年）で阿部寛が演じていた、何ごとも半人前の中途半端な主人公の仕事は興信所の職員だった。そして、その主人公は仕事の延長上で別れた妻の新しい恋人との関係を調査していた。それは外務要一東京都知事と同じように完全な公私混同。それはともかく、本作で朋美の同級生の弁護士と仕事で提携しているという元刑事の興信所の男・本多芳則（永瀬正敏）は、風采はよりかっこいいが、その仕事ぶりを見ている限り相当の腕利きらしい。

それに対して、結婚相談所の所長として乗務を急激に伸ばしてきた柏木は、客乗めや金儲けは上手そうだが、根っからの女好きだから、ホステス（水川あさみ）に甘いのは当然。しかし、そこらあたりからの情報源は大丈夫？また、柏木の女好きは若い女に限らず、小夜子とも「男女の関係」があるそうだが、セックスはセックスか、カネはカネとしっかり割り切り、カネはすべて折半としているところは大阪流。もっとも、結婚相談所という客看板だけではなく、後妻業のエースたる小夜子との共同作業では、殺人を含む裏稼業もこなしてきただけに、柏木の根性は相当タフであっていると思ったが、朋美の依頼を受けた本多からの揺さぶりへの対応を見ていると、柏木は腰が比較的ソフトだから、本作後半はそんな展開になっていくので、この２人の男の攻防戦に注目！

＜思わぬところからほころびが。この結末をどう見る？＞

小夜子の結婚歴は９度もあるそうだが、その何回目かの結婚では息子を産んだらしい。「武内小夜子、６３歳、好きなことは読書と夜空を見ればなどと・・・」われた、尽くすタイプやと思います！この自己紹介がどこまでホントかは知らないが、既に２０歳を大きく過ぎている小夜子の息子（風間俊介）は、母親にカネをせびるばかりのたちの悪い放蕩息子になっていた。私のイメージでは、実際に起きた事例を参考に書き下ろした無川博行氏の原作はかなりシリアスな問題提起型小説だと思っていたが、映画の方は大阪色たっぷりユーモアたっぷりのエンタメ作。そして、本作後半は更にその色を強めている。

後半のストーリーの軸は、本多の調査によって少しずつ柏木と小夜子の「悪事」が暴かれていく中、本多が依頼者の朋美に調査報告書を提出するのではなく、その調査報告書をネタに、柏木と小夜子をゆすろうとしたことによる本多と柏木との攻防戦になっていく。やがて本多にしてみれば、依頼者の朋美に調査報告書を提出して５０万～１００万円の報酬をもらうより、それをネタにして小夜子と柏木から力ネをせびった方がいいと思うのは当然。元刑事だから、それが恐喝罪に該当するとわかっていても、人間の欲はそういうものだ。そして、一方がそうなると、他方も３０００万円という金額で一度は折り合っても、それを払うのが惜しくなり、いっそのこと「この男を消してしまおう」と考えるのも人情だ。そこで扶養主として柏木が利用したのが小夜子の放蕩息子だった。ここでの若造の仕事ぶりは・・・？

日本では平成７年の刑法改正で難罪殺人罪が廃止されたが、本作ラストでは「すわ、実の息子による実の母親殺人事件の発生か！」という展開になるので、それに注目！そんなハプニングを経た結末を動画感覚と見るのか、それとも嘘なる喜劇と見るのか、はあなた次第だ。さらに、「アハハ」と笑いながら楽しく本作を鑑賞した後、ふと人生分の年齢や収入、財産、そして妻と死に別れて一人身になった時の自分のことを等々を想像すると、思わずソー・・・。

２０１